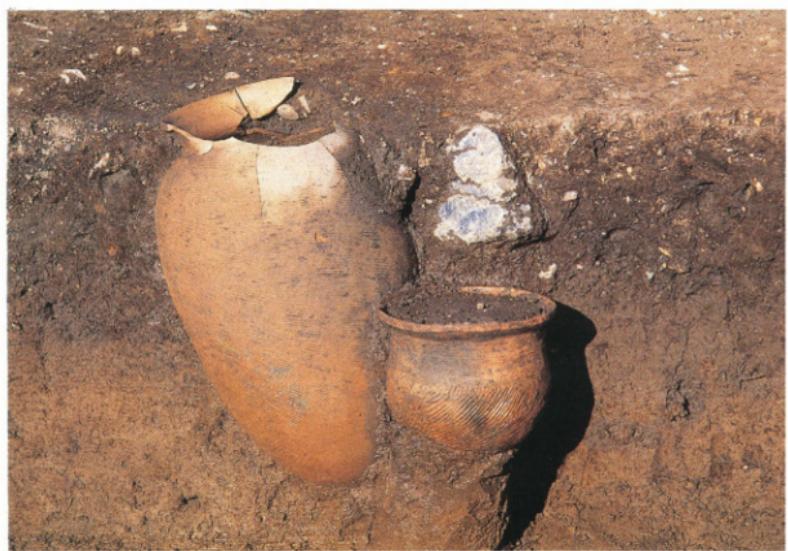


白猪田遺跡

-久礼田地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書-

1997. 3

高知県南国市教育委員会



P 30 遺物出土状況

序

南国市は、高知県の中央部に位置し、物部川と国分川によって育まれた肥沃な香長平野により形成されています。また、市名が示すとおり黒潮のもたらす温暖な気候のもと、早場米の産地として知られ、稲穂のたゆむ田園風景の広がりは、豊かな実りをもたらしています。

この恵まれた自然環境は、太古より人々の繁栄を育み、土佐の政治・文化の中心地「土佐のまほろば」と称され栄えました。

南国市は、県内で最も遺跡の集中する地域であり、急速に進展する開発事業と埋蔵文化財保護との調整が重要な課題となっています。

南国市教育委員会では、久礼田地区県営狙い手育成基盤整備事業に伴い、白猪田遺跡の記録保存のための発掘調査を実施いたしました。その結果、古代の遺構・遺物が数多く発見されました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめたものです。今後広く利用され、文化財保護および学術研究の一助になれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたってご指導を頂きました出原恵三氏並びに調査に深いご理解、ご協力をいただきました地権者の皆様方、関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成9年3月

南国市教育委員会
教育長 西森善郎

例　　言

1. 本書は、平成8年度久礼田地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う、白猪田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 白猪田遺跡は高知県南国市久礼田に所在する。
3. 調査面積は1,018.7m²であり、I～IV区に分けて調査を行った。調査期間は平成8年12月3日～平成9年2月1日である。
4. 発掘調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センターのご協力を得て、南国市教育委員会が主体となって実施した。各役割分担は以下のとおりである。

調査員	三谷民雄	南国市教育委員会	社会教育課	主　　事
タ	西村直也	タ	タ	臨時職員
庶務担当	坂本芳史	タ	タ	主　　事

5. 本書の編集は、出原恵三氏（同埋蔵文化財センター調査第3係長）の指導のもと三谷民雄が行い、執筆は第I～IV章を三谷が、第V章を出原が担当した。
6. 現場作業においては、出原氏のご指導、ご教示を得、宅間一之氏（高知県立坂本龍馬記念館学芸員）のご助言を得た。整理作業においては特に同埋蔵文化財センターの山中美代子、大原喜子、矢野雅氏などのご協力を得た。記して深く謝意を表したい。
7. 発掘調査にあたっては、久礼田土地改良区の皆様をはじめ、地元住民の方々のご理解、ご協力をいただき、現地作業員、整理作業員の皆様のご協力をいただいた。記して深く謝意を表したい。
8. 当遺跡出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は96-NKUである。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 周辺の地理的、歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の方法と経過	4
第Ⅳ章 調査の成果	
1. 基本層序	6
2. 検出遺構と遺物	9
第Ⅴ章 まとめ	20

押図目次

Fig. 1 白猪田遺跡の位置と周辺の遺跡	3
Fig. 2 白猪田遺跡と前嶋遺跡の調査区位置図	5
Fig. 3 I 区東壁・II 区南壁・III 区南壁基本層序	6
Fig. 4 検出遺構全体図	7
Fig. 5 S B 1 平面、エレベーション図	9
Fig. 6 S B 2・3 平面、エレベーション図	10
Fig. 7 S B 4・5 平面、エレベーション図及び出土遺物実測図	12
Fig. 8 S B 6 平面、エレベーション図	13
Fig. 9 S K 1・2 平面、エレベーション図及び出土遺物実測図	14
Fig. 10 S D 1 平面、エレベーション、セクション図及び出土遺物実測図	15
Fig. 11 S D 1 出土遺物実測図	16
Fig. 12 P 30 遺物出土状況及びピット出土遺物実測図	17
Fig. 13 包含層出土の遺物実測図	18
Fig. 14 包含層出土の遺物実測図	19

写真図版目次

- P L. 1 調査前風景（南から）、同（北から）
- P L. 2 III区南壁セクション、I区S B 1 完掘状況
- P L. 3 III区S B 2 完掘状況、IV区S B 4 完掘状況
- P L. 4 III区、IV区全景（南から）、調査区全景（北から）
- P L. 5 I区全景（南から）、III区S K 1 完掘状況
- P L. 6 I区S K 2 完掘状況
- P L. 7 II区S D 1 完掘状況・南北壁セクション
- P L. 8 III区P 30須恵器壺（40）、土師器壺（42）出土状況
- P L. 9 III区P 30須恵器壺（43）出土状況
- P L. 10 III区P 30完掘状況、III区S K 1 土器（8）出土状況、II区S D 1 土器（38）出土状況
- P L. 11 III区P 37土師器（46）出土状況、II区S D 1 土器出土状況
- P L. 12 須恵器蓋（18・19・39・59～62）、土師器蓋（13・41・86）
- P L. 13 須恵器杯身（8・14・31・34・35）、同皿（27）、同壺（76）、土師器碗（46・85）、
綠釉輪花皿（71）
- P L. 14 土師器壺（42・87）、須恵器壺（81・43）同壺（37）、同高杯（38）
- P L. 15 須恵器壺（40）

第Ⅰ章 調査に至る経過

南国市久礼田地区においては、平成7年度より国分川の支流である領石川の東岸に広がる農地44haを対象とした久礼田地区県営担当手育成基盤整備事業が開始され、狭隘で不整形な農地の区画整理や統合、農道・用排水路などの系統的な整備を進め、近代的な農地への転換を図っている。合理的な経営と集約農業により、近年特に多様化が著しい農業に対応し、国際的な競争力を身につけようとするものである。

一方、当事業対象地区内には白猪田遺跡（古墳時代～平安時代）、前嶋遺跡（古墳時代～中世）が存在することが平成元年度に行われた南国市遺跡詳細分布調査で明らかになっている。これらの遺跡は、私たちの祖先が厳しい自然と戦いながら大地に刻み込んだ偽らざる、そしてまた二度と繰り返すことのない歴史である。埋蔵文化財は、過去の実事を藏しているのみならず歴史の歩んできた方向性を示し、現代社会を生きる私たちにとっては、「未来への羅針盤としての役割を担い、眞の国民の共有財産として位置付けられている。」南国市教育委員会では、遺跡のもつ重要性に照らし、文化財保護の立場から、開発部局に対して遺跡の保護と調和のとれた開発行為の実施について数次にわたる協議を重ね、特に遺跡部分の削平面積については極力少なくするよう工法などについての検討を願ってきたところである。そして道路・水路建設予定地、および農地削平地など遺跡の破壊されるおそれのある区域については、南国市教育委員会による試掘調査の結果に基づき必要と認められる部分について、記録保存のための本調査を行うことになった。

まず平成7年度に当事業対象地区内にある遺跡の範囲・内容を確認するための試掘調査（試掘面積303m²）を実施した。その結果、白猪田遺跡からは古墳時代の柱穴や溝が検出され、前嶋遺跡からは古墳時代の竈跡や7世紀頃の堅穴住居址が検出された。また、それらに伴う土師器・須恵器などの遺物が出土した。

平成8年度は、前年度の試掘調査の結果を踏まえて、白猪田遺跡（調査面積1018.7m²）、前嶋遺跡（調査面積291.3m²）の本調査を実施した。

第Ⅱ章 周辺の地理的、歴史的環境

1 地理的環境

白猪田遺跡の所在する南国市は、南に太平洋を望む高知県のほぼ中央に位置し、高知市の東に隣接している。市域の北半分は四国山地に連なる険しい山地で占められ、南半分は県下三大河川の一つである物部川により形成された平野が広がっている。この平野は高知県最大の平野である高知平野の東部に位置し、南国市、土佐山田町、野市町など長岡郡と香美郡に属していたことから、香長平野とも呼ばれ、高知県最大の穀倉地帯を誇っているが、近年は各種の開発が急速に進んでいる。

白猪田遺跡は、南国市の平野部北端東側に位置し、四国の中央を横断する四国山地の南端にある丘陵地と、新改川と領石川が合流して国分川となる地域に挟まれた扇状地に立地する。現地表の標高は、海拔21.5m前後を測り、海岸線より北へ約9mの地点にある。

2 歴史的環境

南国市は、物部川、国分川により育まれた豊かな土壌が広がり、県内で最も多くの遺跡（287遺跡）の集中している地域である。

旧石器時代の遺跡としては、奥谷南遺跡が存在する。ここは全国でも例の少ない旧石器時代の岩陰遺跡であり、ナイフ形石器・スクレイパー・細石器・尖頭器など多量の石器が出土した。

縄文時代のものでは、草創期の隆起線文土器・隆帶文土器が奥谷南遺跡から出土し、中期末から後期初頭にかけてのドングリの貯蔵穴が確認されている。後期の遺跡では、栄エ田遺跡と田村遺跡群があげられる。前者からは後期中葉の土器が出土し、後者からは磨消縄文を中心とした土器群と共に多量の石歯として使用された打製石斧が出土している。

弥生時代になると遺跡数とその規模は、急激に発展する。稻作に適した広大な沖積平野を有することから市域のほぼ全域に遺跡が展開している。なかでも、田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、弥生時代を通して高知平野における拠点的母村集落と考えられている。前期においては竪穴住居群と掘立柱建物群の存在や水田跡などが確認されており、中期に至っては集落の西方への移動が窺われ、土器以外にも勾玉・管玉・ガラス小玉などが出土している。

古墳は舟岩古墳群に代表される後期群集墳が平野部に面する山麓尾根部や独立丘陵上に築かれるが、弥生時代に大きな発展をみせた平野部の集落跡はその姿を消し、僅かに土佐国衙跡などで竪穴住居跡などが検出されているにすぎない。

古代には、律令制度のもとでの土佐国を示す遺跡として、県下最古の寺院跡とみられる比江廃寺跡や土佐国府跡、土佐国分寺跡があり、政治・文化の要となっていた。比江廃寺跡は白鳳時代の寺院跡であり、塔心礎が残されている。土佐国府跡では、11次にわたる調査で官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政庁にかかる遺構は確認されていない。土佐国分寺跡では、現状変更に伴う調査および伽藍配置確認のための調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。その他、南国市域の古代の遺跡としては、田村遺跡群において平安時代前半の掘立柱建物群が検出されており、「田村庄」関係の遺構ではないかと考えられている。



號	名 称	時 代	號	名 称	時 代	號	名 称	時 代
1	白猪田遺跡	古墳～平安	11	寺中遺跡	古墳～平安	21	潤ノ上遺跡	弥生～平安
2	前嶋遺跡	古墳～中世	12	中山田古墳	古 墳	22	三島遺跡	々
3	上岡越遺跡	奈良～平安	13	高松古墳	々	23	池ノ上遺跡	古墳～中世
4	中ノ土居城跡	中 世	14	植田古墳群	々	24	小龍遺跡	弥生～近世
5	東ノ土居遺跡	古墳～中世	15	久礼田城跡	中 世	25	土鳥田遺跡	々
6	沖ノ土居城跡	中 世	16	岡豊城跡	々	26	金地遺跡	弥生～中世
7	泉ヶ内遺跡	古墳～平安	17	土佐國分寺跡	奈良～平安	27	包末土居城跡	中 世
8	畑ヶ田遺跡	々	18	国分寺遺跡群	古墳～近世	28	野中廃寺跡	平安
9	ハザマダ遺跡	々	19	土佐國府跡	弥生～中世	29	横落遺跡	弥生～平安
10	植田土居城跡	中 世	20	比江廃寺跡	白鳳～奈良	30	修理田遺跡	々

Fig. 1 白猪田遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の方法と経過

平成7年度に行った試掘調査の結果から、白猪田遺跡においてピット・溝などの遺構が確認されており、なおかつ道水路の建設などにより遺跡が破壊される区域約1,000m²について調査区を設定した。調査の期間は、平成8年12月3日から平成9年2月1日までであった。調査区については便宜上、現在の水路や水田の畦畔、トレーニチを利用して任意に北側からI～IV区を設定した。調査は工事の計画の制約からI区から着手し、IV区→III区→II区へと進んだ。

発掘調査の手順としては、まず耕作土を重機を用いて除去した。次いで各調査区に重機と手作業によりトレーニチを数ヶ所あけ、地層を確認した後、重機と手作業で一層ごとに掘り進め、遺構の検出、遺物の取り上げを行なった。調査区全体には公共座標に基づいて4m方眼をかけ、南北方向に南から1, 2, 3, …、東西方向に西からA, B, C, …のN.o.を付した。これに基づき遺物の出土地点の記録および遺構の実測を行なった。平面実測図および地層断面図については、20分の1を基本に適宜任意の縮尺を用い、方位は磁北を用いた。

白猪田遺跡のみならず、久礼田地区において本格的な発掘調査が行われたのは今回が初めてであり、地元の関心も高く、1月29日に記者発表および現地説明会を開催したところ、平日にもかかわらず大勢の方々の参加があった。



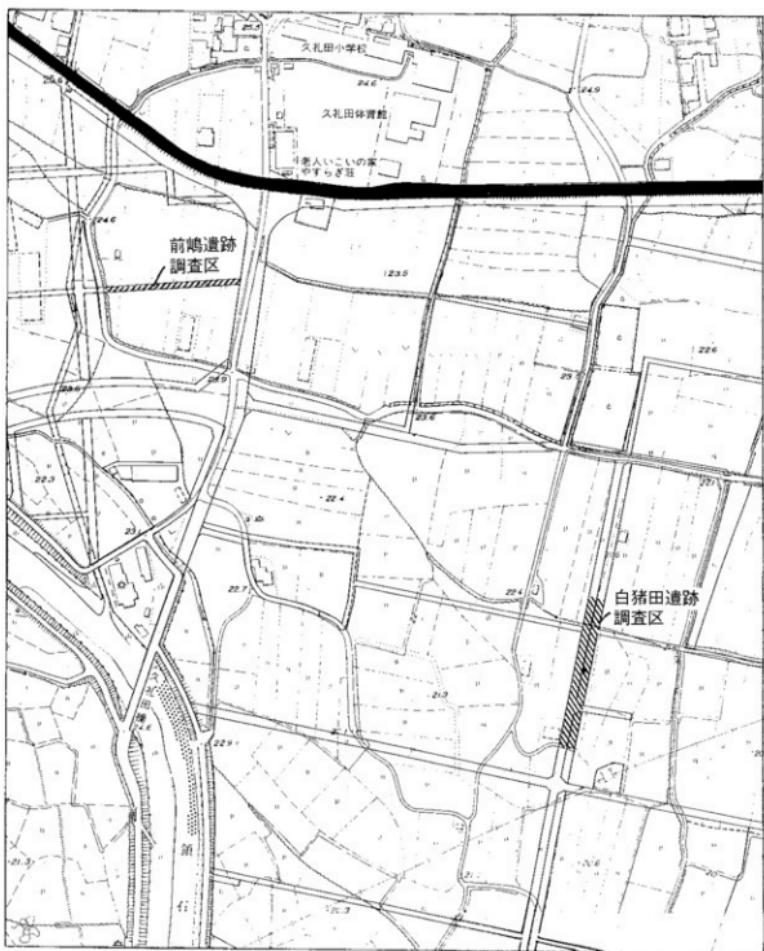


Fig. 2 白猪田遺跡と前嶋遺跡の調査区位置図

第IV章 調査の成果

1 基本層序 (Fig. 3)

調査区の基本層序は、I区東壁の南北セクションとII区とIII区の南壁の東西セクションで3ヶ所で観察した。

(1) I区東壁セクション

I層：耕作土 II層：灰黄色粘質土 III層：黒褐色粘質土 IV層：黄茶色粘質土 V層：灰茶色砂層 VI層：灰黄色砂層 VII層：赤灰色砂層（鉄分を少量含む）が堆積している。III層は古代の遺物包含層であり、IV層が古代の遺構検出面である。V～VII層の砂層は国分川による沖積層である。

(2) II区南壁セクション

I層：黒茶色粘質土 II層：黒灰色粘質土（直径4～5cmの礫を多く含む）III層：灰黄色粘質土 IV層：灰黄色粗砂層～小礫層 V層：砂礫層（直径5mm～3cm）VI層：黒灰色砂層（少量の礫を含む）VII層：黒褐色粘質土が堆積している。I・II層は古代の遺物包含層であり、III層が古代の遺構検出面である。IV～VI層の砂礫層は国分川による沖積層である。

(3) III区南壁セクション

I層：灰黄色粘質土 II層：茶黄色粘質土 III層：黒茶色粘質土 IV層：茶灰色シルトないし砂質土 V層：灰黄色砂質土 VI層：黄茶色砂質土が堆積している。I～III層は古代の遺物包含層であり、IV層が古代の遺構検出面である。III層の落ち込みはピットと考えられる。V・VI層の砂質土は国分川による沖積層である。

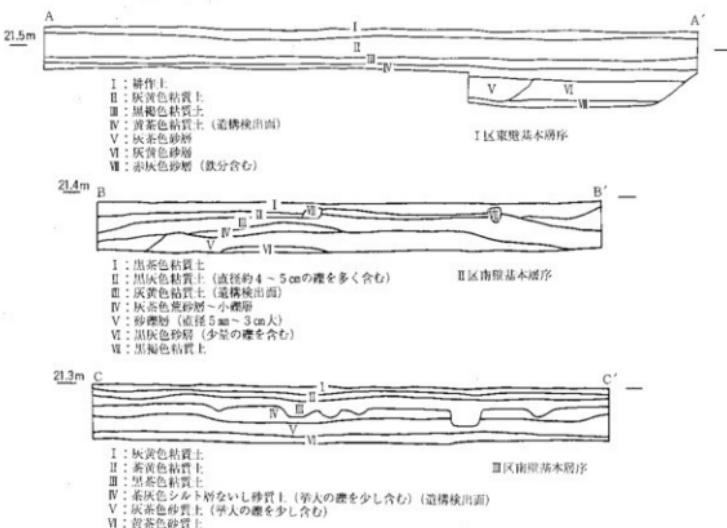


Fig. 3 I区東壁・II区南壁・III区南壁基本層序



Fig. 4 検出構造全体図

2. 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

S B 1 (Fig. 5)

I 区東部に位置し、北東部は調査区外であるため未調査である。建物は、桁行4間(6.88m)×梁行3間(5.3m)の南北棟で、棟方向は磁北よりN-46°-Eである。柱穴の平面は円形を呈し、直径24~44cm、検出面からの深さは6~46cmを測る。柱間距離は、桁梁ともに1.8m前後である。埋土は黒褐色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

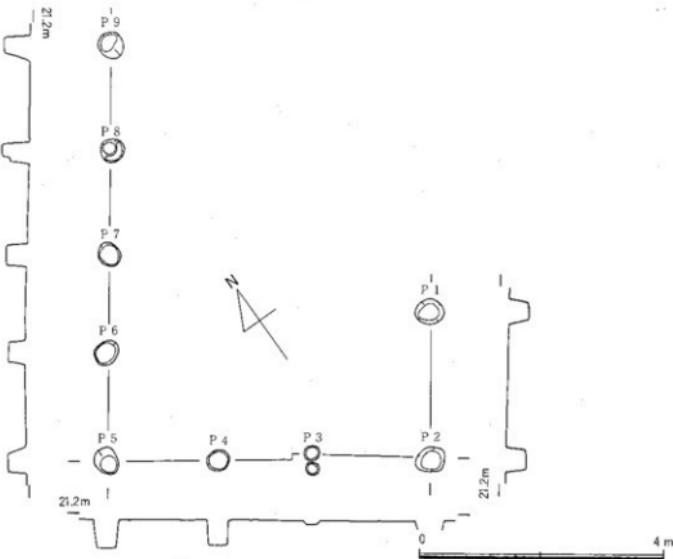


Fig. 5 S B 1 平面、エレベーション図

S B 2 (Fig. 6)

III区北部に位置し、S B 6 と切り合っているが、新古関係は不明である。建物は、2×2間の東西棟で棟方向は磁北よりN-76°-Wである。桁行4.5m、梁行4.3mを測る。柱穴の平面は方形と不整形な円形を呈し、1辺64~80cm、直径50~84cm、検出面からの深さは22~44cmを測る。柱痕はP 1・P 2 の2ヶ所で確認され、直径はそれぞれ20cmと16cmである。P 7 の床面には20cm前後の大きさの礫が3個あった。柱間距離は桁梁ともに2.3m前後であり、埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土しているが、図示できたのは土師器杯身(1)、須恵器杯身(2)のみである。

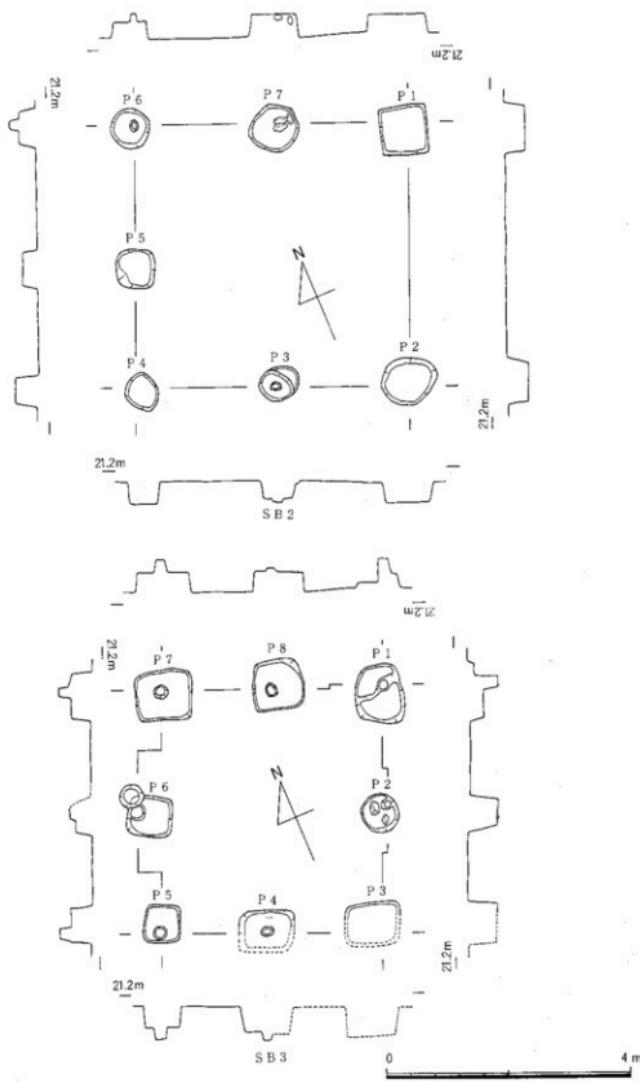


Fig. 6 SB 2・3 平面、エレベーション図

S B 3 (Fig. 6)

Ⅲ区南部に位置し、南辺がトレンチによって切られている。建物は、 2×2 間の南北棟で棟方向は磁北よりN-17.5°-Eである。桁行3.96m、梁行3.62mを測る。柱穴の平面は方形を呈し、1辺60~92cm、検出面からの深さは40~54cmを測る。柱痕はP 3以外のピットで確認され、その直径は18cm程度である。P 2では16cm程度の大きさの礫が1個あった。P 6は他のピットと切り合っているが、新古関係は不明である。柱間距離は桁梁とともに1.8m前後であり、埋土は黒褐色粘質土であった。遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土しているが、図示できたのは須恵器杯身(3)のみである。

S B 4 (Fig. 7)

Ⅳ区中央部に位置する。建物は、桁行4間(7.6m)×梁行1間(4m)の東西棟で、棟方向は磁北よりN-88°-Eである。柱穴の平面は円形を呈し、直径40~76cm、検出面からの深さは16~56cmを測る。柱痕はP 8で確認され、その直径は14cmである。柱間距離は、桁行1.88m前後、梁行4m前後を測る。埋土は黒褐色粘質土であり、遺物は土師器の細片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

S B 5 (Fig. 7)

S B 4の南隣に位置し、東部は調査区外であるため未調査である。建物は、桁行4間(6.4m)以上×梁行2間(3.8m)の東西棟で、棟方向は磁北よりN-60°-Wである。柱穴の平面は円形を呈し、直径52~84cm、検出面からの深さは16~36cmを測る。P 4の床面には15cm前後の礫が数個確認された。柱間距離は、桁行1.6m前後、梁行1.8m前後である。埋土は黒褐色粘質土であり、遺物は土師器の細片が1点出土したが、図示できなかった。

S B 6 (Fig. 8)

Ⅲ区北部に位置し、S B 2と切り合っているが、新古関係は不明である。建物は、桁行3間(8.58m)、梁行2間(4.7m)の南北棟で、棟方向は磁北よりN-17°-Eである。柱穴の平面は不整形な円形を呈し、直径60~70cm、検出面からの深さは12~32cmを測る。柱痕はP 1とP 7の2ヶ所で確認され、それぞれの直径は16cmと24cmである。柱間距離は桁行で1.6~4.6m、梁行で2.1~2.4mであり、埋土は黒褐色粘質土であった。遺物は須恵器・土師器の細片が出土しているが、図示できたのは須恵器蓋(4)、須恵器杯(5)のみである。

(2) 土坑

S K 1 (Fig. 9)

Ⅲ区南西部に位置する。平面はやや不整形な方形を呈している。P 64と切り合っているが、新古関係は不明である。規模は、長軸3.96m、短軸3m、深さ40cmを測る。東側に直径28cm、深さ48cmのピットが掘込まれている。断面は逆台形をなし、埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。遺物は土師器・須恵器の細片が出土しているが、図示できたのは須恵器蓋(6・7)、須恵器杯(7)のみである。8世紀代に属する。

S K 2 (Fig. 9)

I区南端に位置する。平面は不整形であり、北部は2個のピットによって、南部はトレンチにと

って切られるため不明である。規模は、長軸5.2m以上、短軸3.52m、深さ28cmを測る。東側に直径32cm、深さ25cmのピットが掘込まれている。断面は逆台形をなし、埋土は黒茶色粘質土の単純一層である。遺物はごく少量で、図示できたのは須恵器高杯（9）のみである。8世紀代に属する。

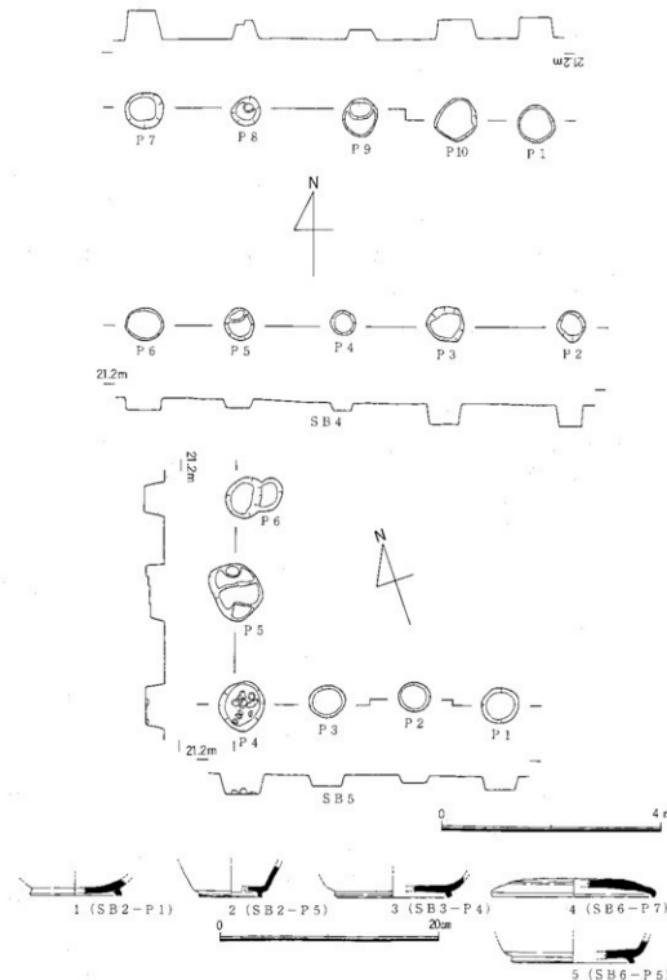


Fig. 7 SB 4・5平面、エレベーション図及び出土遺物実測図
須恵器杯身（1～3・5）、同蓋（4）

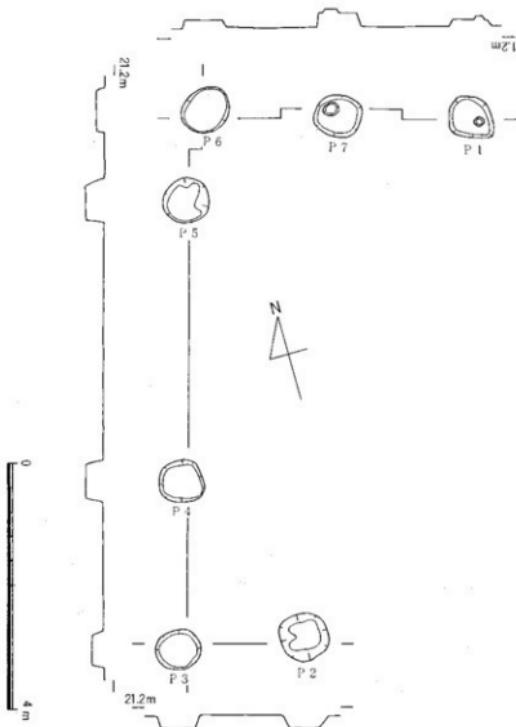


Fig. 8 S B 6 平面、エレベーション図

(3) 溝

S D 1 (Fig.10)

II区西部に位置する。南北方向に走る溝で、北端は細く浅くなっている。規模は長さ約13.2m、幅40~240cm、深さ3~77cmを測る。北部に直径52cm、深さ18cmの楕円形のピット、中央部に直径24cm、深さ15cmの円形のピットが埋込まれている。断面は逆台形を呈する。埋土はI~III層からなり、I層：黄茶色粘質土、II層：黒茶色粘質土（炭化物少々混じる）、III層：茶黒色粘質土（5cm程の多量の礫を含む）である。遺物は多量の土師器、須恵器片が出土したが、図示できたのは土師器蓋（10・12・13）、土師器杯（14~16）、土師器甕（17）、須恵器蓋（11・18~25）、須恵器皿（26~29）、須恵器杯（30~35）、須恵器無頬甕（36）、須恵器甕（37）、須恵器高杯（38）である。8世紀代に属する。

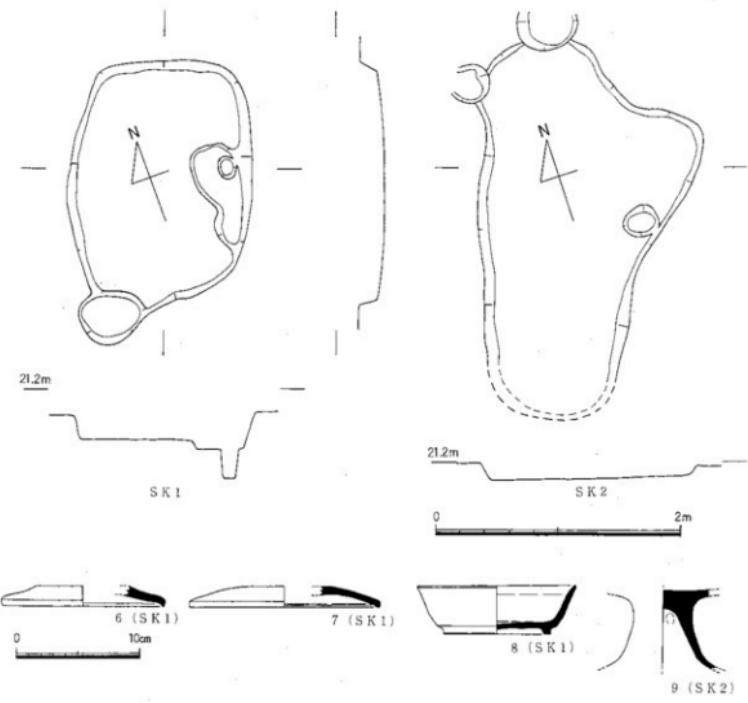


Fig. 9 SK1・2平面、エレベーション図及び出土遺物実測図
須恵器杯蓋（6・7）、同杯身（8）、同高杯（9）

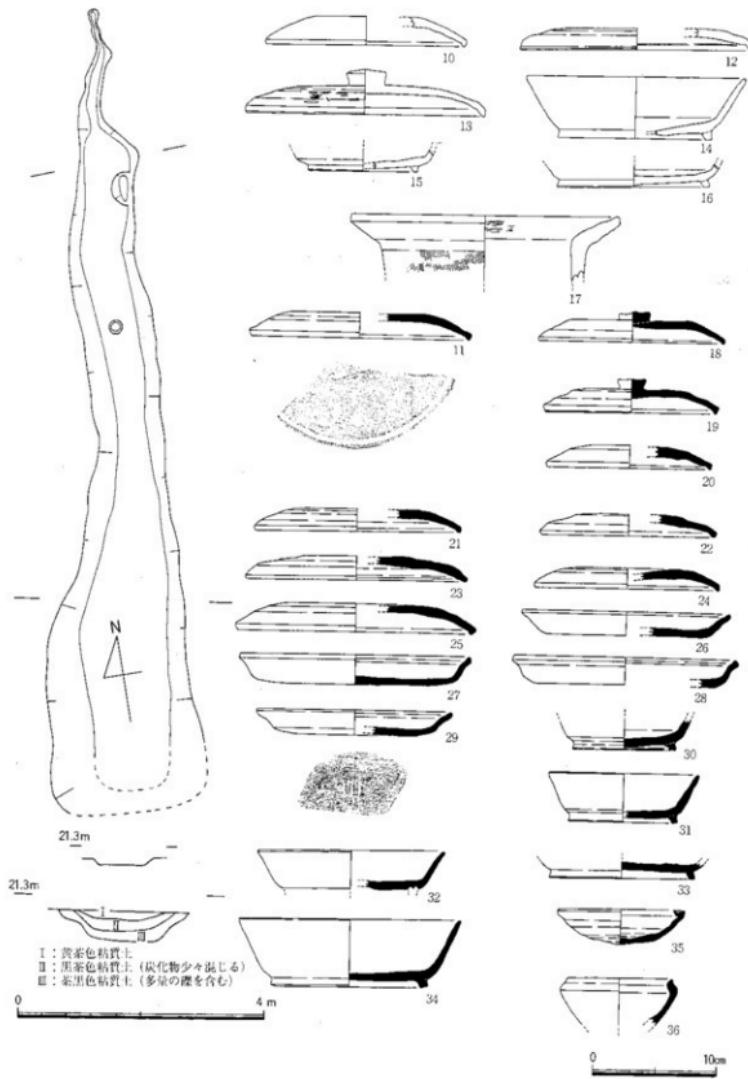


Fig.10 SD 1 平面、エレベーション、セクション図及び出土遺物実測図

土師器杯蓋 (10・12・13)、同杯身 (14・15・16)、同壺 (17)

須恵器杯蓋 (11・18~25)、同杯身 (30~35)、同皿 (26~29)、同壺 (36)



Fig.11 S D 1出土遺物実測図
須恵器甕 (37)、同高杯 (38)

(4) ピット

P 24

III区中央部のやや東側にあり、直径72cm、深さ36cmを測り、平面は円形を呈する。埋土中より須恵器甕 (47) が出土している。

P 30 (Fig.12)

III区の西南部にあり、一辺90cm前後の隅丸方形を呈するピットである。深さは46cmを測り、床面は一部が淀んでいる。このピットからは、須恵器の長胴甕 (40)、須恵器甕 (43)、土師器蓋 (42)、土師器蓋 (39・76) が各々完形で出土している。須恵器甕は軸をやや西に傾斜させて立っており、土師器甕は須恵器甕の下脚部の東側に接して直立していた。須恵器甕は、両者の北側に接するよう直立して出土した。土師器蓋 (39) は須恵器甕の中から、同 (76) は土師器甕の中から出土しており、両者共にそれぞれの蓋として使われていたものが落ち込んだものである。また、須恵器甕には胴部中位以下に土が入っており、上半分は空洞のままであった。

これらの土器は、出土状況から見て、明らかに埋納によるものであり、P 30は地鎮などの祭祀遺構と考えられる。10世紀中葉に比定することができる。

P 32

III区の東南部にあり、直径約70cmの不整形な円形を呈する。深さは23.8cmを測る。直径約80cmの不整形な円形のピットと切り合っているが、新古関係は不明である。埋土中より須恵器皿 (44) が出土している。

P 34

III区中央部のやや南側にあり、直径52cm、深さ15.8cmを測り、平面は円形を呈する。埋土下層中より土師器皿 (45) が出土している。

P 37

III区の南部にあり、一辺が64cmの方形を呈する。深さは36cmを測る。東北隅で柱痕が確認され、その直径は16cm、ピットの検出面からの深さは46.5cmを測る。直径66cmの円形のピットと切り合っているが、新古関係は不明である。埋土中より土師器皿 (46) が出土している。

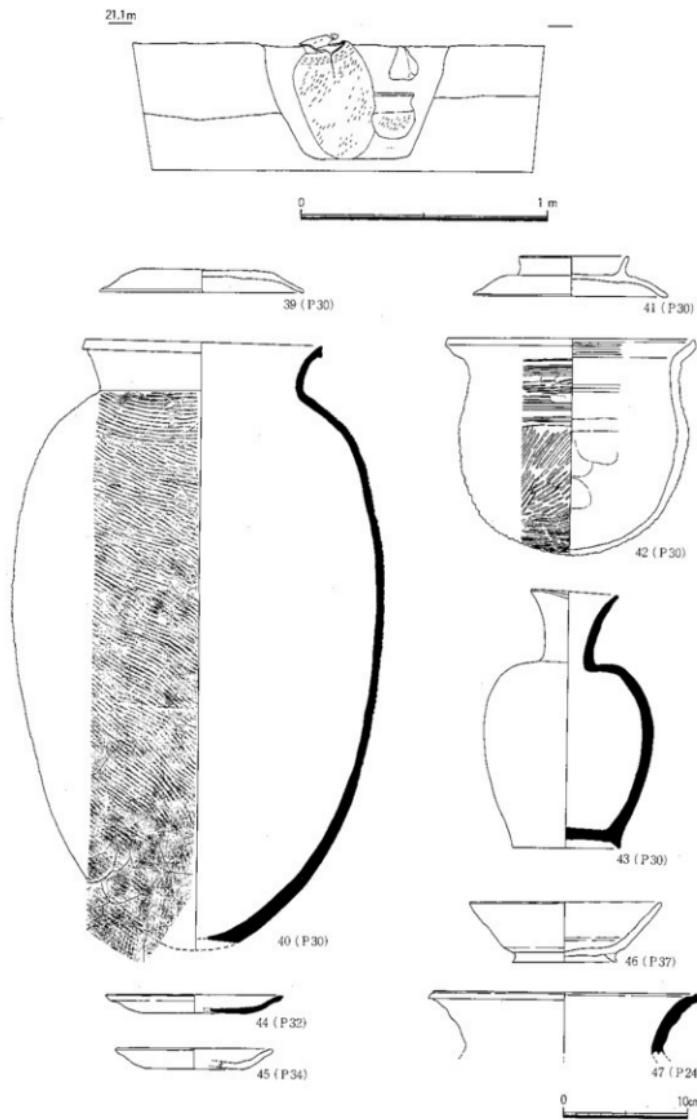


Fig.12 P 30遺物出土状況及びピット出土遺物実測図
 土師器蓋（39・41）、同杯身（46）
 須恵器壺（43）、同壺（40・47）、同皿（44）

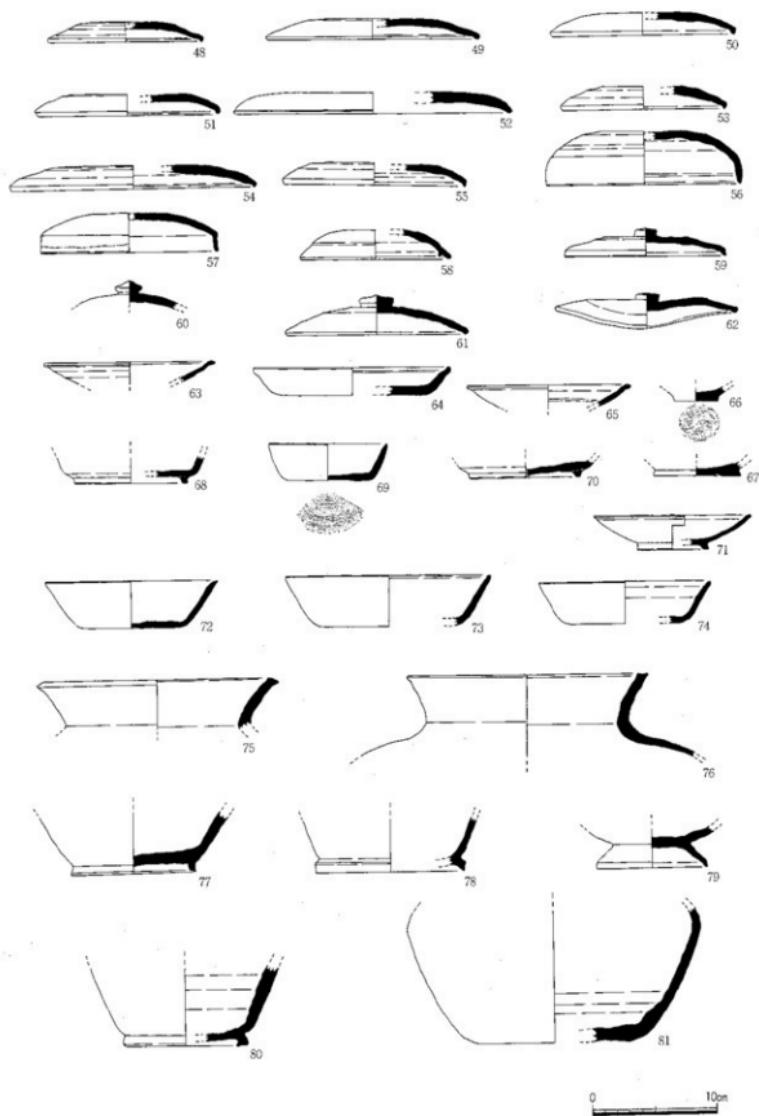


Fig.13 包含層出土の遺物実測図
須恵器蓋 (48~56・58~62)、同皿 (63~65)、同杯身 (68~70・72~74)
同甕 (75・76)、同壺 (77~81)、灰釉蓋 (57)、綠釉皿 (66・67・71)

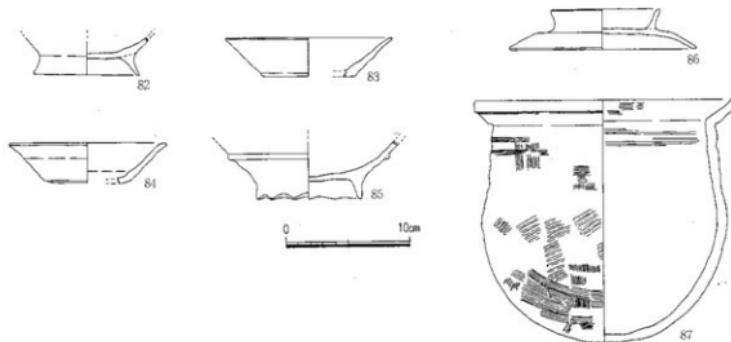


Fig.14 包含層出土の土師器実測図
碗（82）、杯（83～85）、蓋（86）、壺（87）

(5) 造構外出土の遺物 (Fig.13・Fig.14)

造構外の遺物包含層からは、土師器・須恵器が多量に出土したが、時期は古代のものを中心に古墳時代のものが少量含まれる。図示できたのは須恵器蓋（48～56・58～62）、須恵器皿（63～65）、緑釉陶器皿（66・67・71）、須恵器杯身（68～70・72～74）、須恵器壺（75・76）、須恵器壺（77～81）、土師器椀（82）、土師器杯（83～85）、土師器蓋（86）、土師器壺（87）である。

緑釉皿（71）は、SB3の西辺付近のⅢ層（黒茶色粘質土）より出土した輪花皿である。

土師器蓋（86）、土師器壺（87）は、P30の東方2.4mのⅢ層より直立して出土した。土師器蓋は土師器壺の中から出土しており、蓋として使われていたものが落ち込んだものである。本例については造構を確認することが、P30の遺物同様、地鎮などの祭祀のため埋納されたものと考えられる。

第V章 まとめ

1. SD 1 出土の土器

今次調査においては、7世紀から10世紀にかけての遺物が出土しているが、主体を占めるのは8世紀代のものであり、なかでもSD

1からは、一括性の高い供膳形態を中心とした良好な資料を得ることができた。ここではSD 1 出

	坏身	坏蓋	皿	高坏	壺	甕	
土師器	3点	14点	5点	0	0	0	30点 (29.7%)
須恵器	30点	26点	12点	1点	1点	1点	71点 (70.3%)
計	33点	40点	17点	1点	1点	1点	101点

土の資料について土器組成

S D 1 出土土器の器種組成

成や各器種における特徴について観察し、形態・手法上の特徴の抽出と編年的位置付けを試みるものである。

(1) 土器組成

SD 1からは、須恵器・土師器の坏・皿・蓋・甕と須恵器の壺・高坏、および製塙土器と考えられる細片が出土している。製塙土器を除いた須恵器と土師器の組成比率を、図示し得なかったものを含めて器種識別可能な口縁部の点数で見ると、須恵器が71点 (70.3%)、土師器が30点 (29.7%) であり、坏・皿・蓋・高坏の供膳形態に限って見れば、須恵器が69点 (75.8%)、土師器が22点 (24.22%) となり、須恵器の占める割合が圧倒的に多いことを先ず挙げることができる。各器種別の組成比は図示した通りで、須恵器では坏が最も多く、ついで蓋、皿となっている。土師器では蓋が最多で次いで甕、皿、坏となっている。以下須恵器と土師器に分けて器種毎に形態的、手法的な特徴について観察を進める。

(2) 須恵器

坏

確認し得た30点の中で、全体の形を明らかにできるものは3点 (31・32・34) のみであり、口径や器高指数について言及することができないが、明らかに法量差が認められる。また高台を持たないA類と高台を有するB類があるが、図示したものはすべて後者である。両者の比率は明確にし得ないが、後者が多いように思われる。口縁部は32のように僅かに外反するものもあるが、直線的に立ち上がるものが多い。高台は底部外縁よりやや内側に断面長方形で「ハ」字状にしっかりと踏ん張るように貼付されており、貼付けは横ナデにより凹状をなしている。外底はヘラ切り後丁寧なナデ調整が施されており、高台貼付後に高台脇を強く横ナデ調整することも特徴として挙げができる。総じて丁寧なつくりである。

皿

12点出土している。口径は15.7cmから18.4cmのうちにあり、器高指数は11.4から13.0を示している。底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反し全て摘み上げ、端部は丸く納めている。体部内外面は丁寧な横ナデ調整がなされ、外底はヘラ切り痕をナデ消しているが、中には粘土紐の単位をとどめているものもみられる。

蓋

26点出土している。口径は14~15cmの小型のものと18~19cmの大型のものに分かれる。口縁部は下方に積み出され断面が三角形状を呈し、口縁部端面はしっかりした面をなしている。天井部外面は左→右の丁寧なヘラ削りがなされ、他の部位は丁寧な横ナデ調整がなされている。やや扁平化した摘みの付くものも多い。

高坏

1点(38)のみである。坏上半部の形状は不明であるが、柱状部から強く屈曲した裾部を有し端部は下方に積み出され丁寧な横ナデ調整がなされている。本例は脚部と坏部が分割成形されているが注目すべきこととして、脚部と坏部とで全く異なる胎土が使われている。

壺・甕

無頸壺が1点(36)と大型の壺口縁部が1点(37)出土している。前者は本県ではほとんど例を見ないものである。後者は外反しながら立ち上がる頸部から口縁部が強く外反している。両者ともに丁寧な横ナデ調整で仕上げられている。

(3) 土師器

坏

全体の形状を復元できるものは1点(14)のみで、底部は2点(15・16)を図示することができた。A類とB類が有るが後者が多い。全体のシルエットや高台の形状、成形手法は須恵器と同様であるが内外面ヘラ磨きがなされている。

皿

口縁部が5点出土しているが図示できるものはない。坏と同様に形態・成形手法とともに須恵器と同じである。

蓋

14点出土している。須恵器蓋と同じように大・小の法量分化が認められる。口縁端部は下方に曲げられ端面はしっかりした面をなしている。天井部外面は須恵器蓋と同じように左→右のヘラ削りがなされている。内外面ヘラ磨きされるものと外面ヘラ磨き、内面ナデ調整のものがある。

以上土師器の供膳形態の成形手法については、破片資料がほとんどであるために十分な観察ができないが、観察可能なものの(14・16)についていわゆる回転台土師器に属するものである。

壺

8点出土しているが図示可能なものは1点(17)のみである。胎土は濃茶色で石英粒砂を含んだものと淡茶色でチャートを含むものとがある。前者は搬入品で、後者は在地産である。総じて直立気味の胴部から口縁部が「く」字状に外反し、口唇部は面取りをしているがやや甘さが見られる。胴部外面、口縁部外面はハケ調整、口縁部屈曲部外面はヨコ方向の強いナデ調整を行っている。

(4) SD 1出土土器の特徴と編年の位置付け

南四国においても近年の発掘調査の増加に伴い古代の土器資料が増加しつつあり、地域性の抽出や編年研究が進展しつつある。筆者は当地域の古代の土器について、大きく前半と後半とに分け、後半については4小

期区分を試みた⁽¹⁾。前半は須恵器と土師器に互換性や器種の法量分化が認められ、いわゆる律令的土器様式の特徴を有している段階、後半は伝統的な形態を一部器種に留めながらも供膳形態として須恵器がほとんど消滅し、土師器を中心とした在地の土器様式の成立と展開に求めることができるとした。またこの前半と後半は土器の成形手法のうえでも大きな変化の生じることを指摘した。そして前半の終わりを9世紀後半頃、後半の開始期として9世紀末～10世紀初めを比定した。SD1出土土器はすでに見たように土師器と須恵器から成る供膳形態が中心であり、須恵器が圧倒的に多くを占めているが、両者は形態・法量において酷似しており強い互換性を保っていることが指摘できる。したがってSD1の土器群は前半期に位置付けることが可能である。

南四国の古代前半期の良好な資料としては、十万遺跡SK50⁽²⁾、小籠遺跡SK106⁽¹⁾、下ノ坪遺跡SK1、同SD817⁽³⁾等を挙げることができる。このうち下ノ坪遺跡のSK1は、質量ともに最良の資料であり、8世紀後半に比定されている基準資料である。他の二者は、8世紀末～9世紀初頭に位置付けられるものである。SK1と白猪田遺跡のSD1を比較した場合、両者ともに須恵器が圧倒的多くを占めているという組成上の共通点は有しているが、各器種の形態・手法上の特徴についてはいくつかの相違点を指摘することができる。(1)須恵器壺では、SD1の場合は先述したように仕上げが丁寧なのに対して、SK1では外底のヘラ切り後の調整が粗雑になされているものが多く見られる。(2)須恵器蓋は、SD1では丁寧なヘラ削りとナデ調整で仕上げられているのに対し、SK1は削りの省略されたものが見られる。(3)皿は須恵器・土師器とともに、SD1では口縁部摘み上げの手法が例外なく見られるのに対して、SK1のものは同手法が形骸化あるいは認められないものも多い。(4)土師器壺口唇部は、SK1では強いナデ調整によって上下に拡張されるのに対して、SD1は面取りはされるが、上下の拡張は認められない。この上下拡張は小籠遺跡SK106にも認められる特徴である。以上のような形態・手法上の特徴から白猪田遺跡SD1の土器群は、下ノ坪遺跡SK1に先行する時期の所産として位置付けることができる。したがって現状においては8世紀前半、8世紀第2四半期の一括資料として理解したい。このような時期比定をした時、土器生産に関連する事項として注目すべきことは、回転台土師器の存在である。

すでに周知のように、汎西日本的に存在する回転台土師器は、畿内の土師器生産に対置される畿外の土師器生産手法であり、それが技術的な側面のみならず古代の手工業生産体制のあり方そのものに起因した産物として把握されている⁽⁴⁾。その出現については、畿内周辺では9世紀前半、畿外では8世紀中頃までに見られ、9世紀後半から10世紀後半にかけて最盛期を迎えるとされている⁽⁵⁾。出現の背景としては、律令的な土器生産の弛緩、特に須恵器生産の衰微が挙げられている。しかしながら今次資料によって明らかになったように、南四国においては8世紀の第2四半期の段階で回転台土師器はすでに普遍的な存在であり、律令的土器様式の一翼を担っているのである。かかる事実は律令的な土器生産の弛緩や須恵器生産の衰微とは無関係に存在していることを示すものであり、むしろ当該期における上器生産の土師器工人と須恵器工人の未分化という分業のあり方を示唆する現象として把握することができる。このことは南四国における律令期の土器生産を理解する上で注目すべき現象であり、同時に地域における律令体制の展開と浸透を明らかにする上においても今後重要な研究課題となるであろう。

回転台土師器の成立と展開については、8世紀の第2四半期に先行する第1四半期、さらに7世紀の土師器生産を明らかにして初めて体系的な把握が可能となるものであり、今後資料の増加をまって検討を進みたい。

2. 検出遺構について

今次調査では、掘立柱建物6棟、土坑2基、溝状遺構1基、ピット多数を検出することができた。ピットは3・4区に集中しており、その多くは掘立柱建物を構成するものと考えられるが、調査範囲が限られていることもあって、建物としては6棟を復元し得たに過ぎない。この6棟についても北端に位置するSB1を除くと柱穴の列び、軸方向、柱間距離などあまり整然としたものではない。これらのうち、2間×2間で比較的しっかりした方形の掘り形を持ったSB3は、倉庫の可能性があるが、他の建物についてはその性格について明らかにすることは難しい。しかしながらこれらの建物の時期については、遺物が皆無であったSB1以外は、概ね8世紀代に属するものとして捉えることができる。高知平野における8世紀を含めて古代に属する掘立柱建物は、土佐国衙、十万遺跡、曾我遺跡、下ノ坪遺跡などで検出されているが、方形の掘り形を持ち、軸方向を整えた整然とした列びを有したものが多く、官衙あるいは官衙関連遺構として捉えられるものである。したがって今次白猪田遺跡例は、これらの諸遺跡例とは、性格を異にするものとして理解しなければならない。そこで考えられることは、当遺跡の南1km、国分川の下流にある土佐国衙との関係である。

今日、国府域の推定をめぐる研究は、大きな転機を迎えており。すなわち從来支配的であった歴史地理学的な研究に依拠した方形区画に基づいた小都城的なモデル化の想定は、各地の実態に符号しないことが明らかになっており、その位置付けをめぐっては新たな検討が要請されている^④。そのような中で、発掘成果で得られた知見をもとに機能的な配置に基づく国府域を想定した研究が注目を集めている。土佐国衙の調査はこれまで11次^⑤にわたって実施されており、多くの成果を収めているが、未だ中心建物群の検出には至っておらず、その位置についても推定の範囲を出ない状況にあり、しかもその周辺部における調査事例が甚だ僅少ななかにあって、今次白猪田遺跡の遺構の性格付けを試みることを暴論の誂りを免れない。しかしながら掘立柱建物群と比べて、時期は降るもの緑釉輪花皿・灰釉陶器の出土やP30の地鎮と考えられる祭祀土坑の存在を考えた時、一般集落としての位置付けよりも「国府集落」^⑥としての理解の仕方が妥当であろう。具体的な施設比定是不可能であるが、国庁と国分川を通じて機能的に結び付いた国府を構成する遺構群として位置付けたい。

最後に本小論を記するにあたっては、土器については中島恒次郎（太宰府市教育委員会 文化課 主任技師）に、遺構の性格等については森公章（高知大学人文学部助教授）の懇切なる指導を頂いた。記して深く感謝の意を表したい。

- 1) 出原 恵三「小籠遺跡出土の古代土器について」「小籠遺跡Ⅱ」 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 2) 高橋 啓明・出原 恵三・吉原 達生「十万遺跡発掘調査報告書」 高知県香我美町教育委員会 1988年
- 3) 池澤 俊幸「高知原野市町 下ノ坪遺跡の古代土器より」「第8回四国中世土器研究会発表会資料」 四国中世土器研究会 1996年
- 4) 森 隆「回転台土師器の研究史素描」「中近世土器の基礎研究X」 日本中世土器研究会 1994年

- 5) 橋本 久和『中世土器研究序論』真陽社 1992年
- 6) 金田 章裕「国府の形態と構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集 国立歴史民俗博物館 1995年
- 7) 高知県教育委員会・他『土佐国衙発掘調査報告書』第1（1980年）～11集（1993年）他
- 8) 荒井 健治「国府周辺に広がる集落遺構の性格について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集 国立歴史民俗博物館 1995年

遺物観察表

Fig. No.	拝図 番号	出土地点	器種	法量(cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
7	1	SB2-P1	須恵器 杯				7.8 (底径8.0)	チャートの細粒砂を含む。黄灰色。 内・外面・横ナデ調整。	
"	2	SB2-P5	須恵器 杯				6.6 (底径6.1)	精選された胎土。灰褐色。外面に自然瘤 がかかる。内・外面・横ナデ調整。	
"	3	SB3-P4	須恵器 杯				10.4 (底径10.0)	精選された胎土。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
"	4	SB6-P7	須恵器 蓋	14.8	1.7			チャート・長石の細・粗粒砂を含む。 灰色。内・外面横ナデ調整。	
"	5	SB6-P5	須恵器 杯				12.5 (底径11.2)	精選された胎土。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
9	6	SK 1 下層	須恵器 蓋	12.8	1.6			長石の細・粗粒砂を含む。 灰色。内・外面横ナデ調整。	
"	7	SK 1 上層	須恵器 蓋	15.4	1.7			チャートの細粒砂を含む。 灰色。内・外面横ナデ調整。	
"	8	SK 1	須恵器 杯	12.8	4.0		9.6 (底径8.7)	長石の細粒砂を含む。 灰色。内・外面横ナデ調整。	
"	9	SK 2 上層	須恵器 高杯					長石の細粒砂を含む。灰色。 内・外面の器表が荒れている。	
10	10	SD 1 下層	土師器 蓋	16.0	2.3			長石・赤色風化縁の細粒砂を含む。橙色。 口縁端部に丁寧な面取り。 内・外面調整不明。	
"	11	SD 1 上層	須恵器 蓋	18.0	2.1			チャートの細・粗粒砂を多く含む。灰色。 天井部外面弱い削り。他は丁寧な横ナデ 調整。天井部内面にヘラ記号。	回転台右回り。
"	12	SD 1 上層	土師器 蓋	18.8	1.7			精選された胎土。橙色。 内面はナデ、外はヘラ磨き。	
"	13	SD 1 上層	土師器 蓋	19.6	3.7			精選された胎土。橙色。 内・外面ヘラ磨き。	
"	14	SD 1 中層	土師器 杯	17.6	5.0		12.3 (底径12.5)	長石の細粒砂をわずかに含む精選された 胎土。橙色。調整不明。	
"	15	SD 1 上層	土師器 杯				10.8 (底径8.8)	精選された胎土。橙色。 内面ヘラ磨き。外は調整不明。	
"	16	SD 1 上層	土師器 杯				12.3 (底径12.2)	長石細粒砂を含む。 内・外面横ナデ調整。	
"	17	SD 1 下層	土師器 裏	21.6				石英・長石粗粒砂を多く含む。赤茶色。 脇部外筋縫ハケ、口縫部内・外面横ハケ。 頭部外筋縫強い横ナデ。口縫端部を面取り。	
"	18	SD 1 上層	須恵器 蓋	15.0	2.5			チャート他の細粒砂を含む。灰色。 内・外面の器表の荒れが激しい。	

遺物観察表

Fig. No.	神岡 番号	出土地点	器種	法量(cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
10	19	SD 1 上層	須恵器 蓋	14.2	2.7			精選された胎土。灰色。 天井部外面へラ削りナデ。 他の部位は横ナデ。	回転台右回り。
#	20	SD 1 上層	須恵器 蓋	13.2	1.9			精選された胎土。灰色。 天井部外面へラ削り。内面横ナデ。	回転台右回り。
#	21	SD 1 下層	須恵器 蓋	16.8	1.9			チャート・長石の細粒砂を含む。灰褐色。 天井部外面へラ削り+横ナデ。 内面横ナデ。	回転台右回り。
#	22	SD 1 中層	須恵器 蓋	14.0	1.8			チャート・長石・他の繊・粗粒砂を多く含む。灰色。内・外面横ナデ。	
#	23	SD 1 中層	須恵器 蓋	17.8	2.0			精選された胎土。灰色。 内・外面丁寧な横ナデ。	
#	24	SD 1 下層	須恵器 蓋	14.8	1.7			長石・チャートの細粒砂を多く含む。 黄褐色。天井部外面へラ削り。 他の部位は横ナデ。口縁端部削取り。	回転台右回り。
#	25	SD 1 中層	須恵器 蓋	19.2	2.3			チャート・他の繊・粗粒砂を多く含む。 灰色。天井部外面へラ削り。 他の部位は横ナデ。口縁端部削取り。	回転台右回り。
#	26	SD 1 中層	須恵器 皿	16.6	1.9	12.5		チャートの繊・粗粒砂を含む。灰色。 内・外側の器表の荒れが激しい。	
#	27	SD 1 上層	須恵器 皿	18.4	2.4	16.4		長石・チャートの繊・粗粒砂を多く含む。 灰色。内・外側の器表の荒れが激しい。	
#	28	SD 1 上層	須恵器 皿	17.8	2.3	14.5		チャート・他の繊粒砂を含む。灰白色。 内・外側の器表の荒れが激しい。	
#	29	SD 1 中層	須恵器 皿	15.7	2.0	9.6		チャート・長石の繊・粗粒砂を含む。 灰色。底部外面にヘラ記号。 内・外側に横ナデ調整。	
#	30	SD 1 中層	須恵器 杯			9.1 (底径8.1)		マンガン・長石繊粒砂を含む。淡灰色。 焼成不良。外面は横ナデ。底部内面は横ナ デ後に一定方向のナデ。外底へラ切り痕あり。	
#	31	SD 1 上層	須恵器 杯	12.1	4.0	9.3 (底径8.7)		チャート・長石の繊・粗粒砂を含む。 灰色。内・外側横ナデ。	
#	32	SD 1 下層	須恵器 杯	15.1	3.1	11.2		精選された胎土。灰色。 内・外側横ナデ。高台剥落。	
#	33	SD 1 上層	須恵器 杯			11.5 (底径11.5)		チャート・他の繊粒砂。灰色。 内・外側の器表の荒れが激しい。	
#	34	SD 1 上層	須恵器 杯	18.0	5.5	14.1 (底径12.8)		長石の細粒砂を多く含む。灰白色。 内・外側丁寧な横ナデ。	
#	35	SD 1 下層	須恵器 杯	10.2	2.7	5.4		チャートの粗粒砂を多く含む。灰色。 体部外側横ナデ。底部外側粗いナデ。か えりはとがっている。受け部内面横ナデ。	
#	36	SD 1 上層	須恵器 壺	8.6				チャート・他の繊・粗粒砂を含む。灰色。 外側に自然輪がわざかにかかる。	無頭蓋。

遺物観察表

Fig. No.	捕団 番号	出土地点	器種	法量(cm)			特 徴	備 考
				口径	高さ	胸径		
11	37	S D 1 底面	須恵器 甕	26.0			チャート・長石の細・粗粒砂を含む。 灰色。内・外面横ナデ。	
"	38	S D 1 底面	須恵器 高杯			10.5	精選された胎土を用いているが、杯部は 灰色、脚部は灰褐色を呈する。 内・外面の器表の荒れが激しい。	
12	39	P 3 0	土師器 蓋	16.4	1.85		赤色風化縫の細・粗粒砂を含む。橙色。 外底にわずかに粘土筋の単位がみられる。 内・外面ナデ調整。	
"	40	"	須恵器 甕	19.2	49.7	30.0	精選された胎土。灰褐色。口縁部内・外 面横方向ナデ。胴部外面叩き。 底部に3.5cmの焼成後穿孔あり。	
"	41	"	土師器 蓋	16.4	1.85	(底径 8.8)	チャート・赤色風化縫の細・粗粒砂を含 む。橙色。内・外面横ナデ調整。	
"	42	"	土師器 甕	19.8	17.7		チャートの粗粒砂を多く含む。褐色。胴部外面上 半・口縁内面に水理の粗い横ハケ。腹部外面下半 叩き、内面推圧痕覗く。口縁部外側横ナデ。	
"	43	"	須恵器 甕	7.0	29.0	8.5	チャートの細・粗粒砂を多く含む。 灰色。内・外面横ナデ調整。	
"	44	P 3 2	須恵器 皿	14.4	1.5	8.8	チャート・長石の細粒砂を含む。 内・外面横ナデ。	
"	45	P 3 4	土師器 皿	12.6	1.6	7.8	チャートの粗粒砂・袴母・赤色風化縫の 細粒砂を含む。黄褐色。内・外面横ナデ。	底部外面に黒斑 あり。
"	46	P 3 7	土師器 杯	15.4	4.9	9.5 (底径8.4)	赤色風化縫の粗粒砂を多く含む。橙色。 内・外面横ナデ調整。	
"	47	P 2 4	須恵器 甕	21.2			精選された胎土。灰色。 口唇上端僅つまみ出し。 内・外面強い横ナデ。	
13	48	II区包含層	須恵器 蓋	12.3	1.65		長石の細・粗粒砂を多く含む。灰色。 内・外面丁寧な横ナデ。	
"	49	"	須恵器 蓋	17.1	1.7		長石の細・粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ。	
"	50	"	須恵器 蓋	14.8	1.8		チャートの細・粗粒砂を含む。 内・外面横ナデ。	
"	51	III区包含層	須恵器 蓋	14.6	1.8		長石の細・粗粒砂を多く含む。灰色。 天井部外面へラ削りナデ。 他の部位は横ナデ。	回転台右回り。
"	52	"	須恵器 蓋	22.2	1.7		長石その他の小穂・粗・粗粒砂を含む。 灰黄色。内・外面横ナデ。	
"	53	"	須恵器 蓋	13.0	1.9		精選された胎土。灰色。 内・外面横ナデ。	
"	54	"	須恵器 蓋	19.6	1.9		長石他の細粒砂を含む。 天井部外面へラ削り+横ナデ。 他の部位は横ナデ。	回転台右回り。

遺物観察表

Fig. No.	検査番号	出土地点	器種	法量(cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
13	55	II区包含層	須恵器 蓋	14.6	1.8			精選された胎土。灰色。 内・外面丁寧な横ナデ。	
#	56	I区包含層	須恵器 蓋	15.8	4.4			精選された胎土。灰色。 天井部外側へラ削り。 他の部位は横ナデ調整。	
#	57	#	灰釉 蓋	14.2	3.2			表面は須恵質、長石他の細・粗粒砂を含む。外面 は天井部から口縁部中位まで施釉。端部はわずか に反曲。天井部外側へラ削り。内面は横ナデ。	回転台右回り。
#	58	III区包含層	須恵器 蓋	12.2	2.4			長石の細・粗粒砂を含む。灰色。 外側は弱い削り+横ナデ。 内面は横ナデ調整。	回転台右回り。
#	59	#	須恵器 蓋	12.8	2.3			チャート・長石の細粒砂を含む。灰色。 天井部外側へラ削り、内面不定方向のナ デ。	回転台右回り。
#	60	II区包含層	須恵器 蓋					チャートの細・粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
#	61	II区包含層	須恵器 蓋	14.3	3.2			チャート・長石の細・粗粒砂を含む。 灰色。天井部内面に丁寧なナデ。 他の部位は横ナデ。	回転台右回り。
#	62	II区包含層	須恵器 蓋	14.7	3.0			チャート・長石の細・粗粒砂を多く含む。 灰色。内・外面横ナデ調整。	
#	63	#	須恵器 皿	13.8				チャートの粗粒砂を少量含む。灰白色。 内・外面横ナデ調整。内面に自然釉。	
#	64	#	須恵器 皿	15.7	2.3	13.6		精選された胎土。灰色。 内・外面横ナデ調整。 口縁端部つまみ出し。	
#	65	#	須恵器 皿	11.8				石英の微粒砂と長石の粗粒砂を少量含む。 灰白色。内・外面横ナデ調整。 内・外面灰釉あるいは自然釉?	
#	66	I区包含層	綠釉陶器 皿			3.4		精選された胎土。外底以外全面施釉。 底部外面に糸切り痕あり。	
#	67	包含層	綠釉陶器 皿			7.0		精選された胎土。灰色。 内・外面に薄緑色の釉。 蛇ノ目状高台を有す。	
#	68	III区包含層	須恵器 杯			10.8 (底径9.2)		長石の細・粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
#	69	IV区包含層	須恵器 杯			7.4		精選された胎土。灰色。 底部外面に粗いナデ。 他は丁寧な横ナデ。	
#	70	III区包含層	須恵器 杯			10.5 (底径9.0)		長石の粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
#	71	#	绿釉陶器 皿	12.6	2.8	7.6 (底径8.8)		精選された胎土。内・外面丁寧な横ナデ +施釉。口縁部に輪花紋。削り出し高台。	
#	72	IV区包含層	須恵器 杯	13.9	3.8	9.5		チャートその他細・粗粒砂を多く含む。 灰色。内・外面横ナデ調整。 底部へラ切り。	

遺物観察表

Fig. No.	排圖 番号	出土地点	器種	法量(cm)				特徵	備考
				口径	器高	胴径	底径		
13	73	包含層	須恵器 杯	16.6	4.1			長石の細・粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
"	74	Ⅱ区包含層	須恵器 杯	13.8	3.5		10.6	精選された胎土。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
"	75	"	須恵器 甕	18.1				長石の細粒砂を多く含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
"	76	Ⅱ区包含層	須恵器 甕	19.4				チャートの細・粗粒砂を含む。灰色。 口縁部内・外面横ナデ。胴部外面は叩きを横ハケで消す。内面は横ナデ。	
"	77	"	須恵器 甕				9.6 (高台径9.8)	長石他の細・粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。外底に窓壁が付着。	
"	78	Ⅲ区包含層	須恵器 甕				11.4 (高台径12.0)	長石の細・粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
"	79	Ⅳ区包含層	須恵器 甕				8.1 (高台径9.0)	長石の細・粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
"	80	Ⅱ区包含層	須恵器 甕				10.5 (高台径9.8)	精選された胎土。灰台。 高台は外方にふん張る。 内目にはロクロ目が残る。外面はナデ。	
"	81	I区包含層	須恵器 甕				12.4	長石の粗粒砂を含む。灰色。 内・外面横ナデ調整。	
14	82	Ⅳ区包含層	土師器 椀				8.0 (高台径8.6)	長石・赤石風化礫を多く含む。淡黄褐色。 内・外面横ナデ調整。 外底へラ切り痕あり。	
"	83	Ⅲ区包含層	土師器 杯	13.6	3.1		7.4	長石・他の細粒砂を含む。橙色。 内・外面器表の荒れが激しい。	
"	84	"	土師器 杯	12.6	3.3		5.1	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。 橙色。内・外面の器表の荒れが激しい。	
"	85	Ⅱ区包含層	土師器 杯				9.1 (高台径8.0)	長石の細粒砂を含む。橙色。下胴部に隕衛貼付。高さ1.5cmの貼付高台、焼成後下端部をアーチ状に抉る。	外面煤ける。
"	86	Ⅲ区包含層	土師器 蓋	15.3	3.3		(撲み径 8.8)	チャート他の粗粒砂を多く含む。淡茶色。 内・外面横ナデ調整。	
"	87	"	土師器 甕	20.9	19.9			石英・長石他の細・粗粒砂を多く含む。黄灰色。胴部外面上半部ハケを基調とするも、剥離のためほとんど消えている。 下半は叩き。底部はハケ。口縁部内張。上胴部内面横ハケ。	

図 版



調査前風景（南から）



調査前風景（北から）

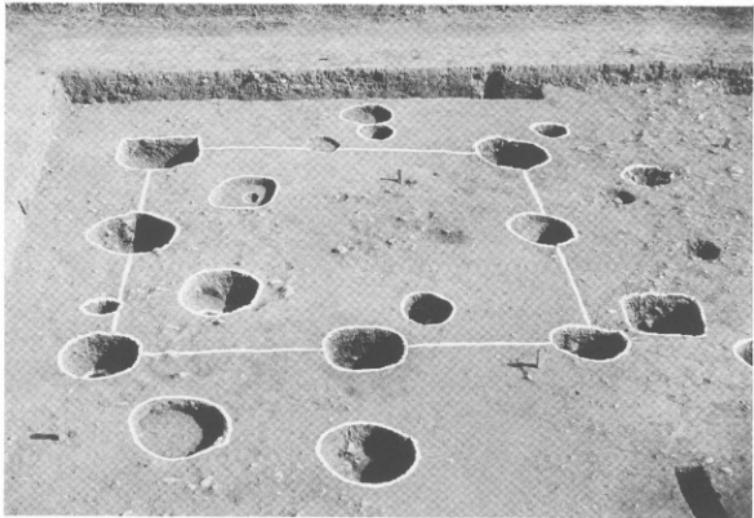
P.L. 2



III区 南壁セクション



I区 SB1 完掘状況

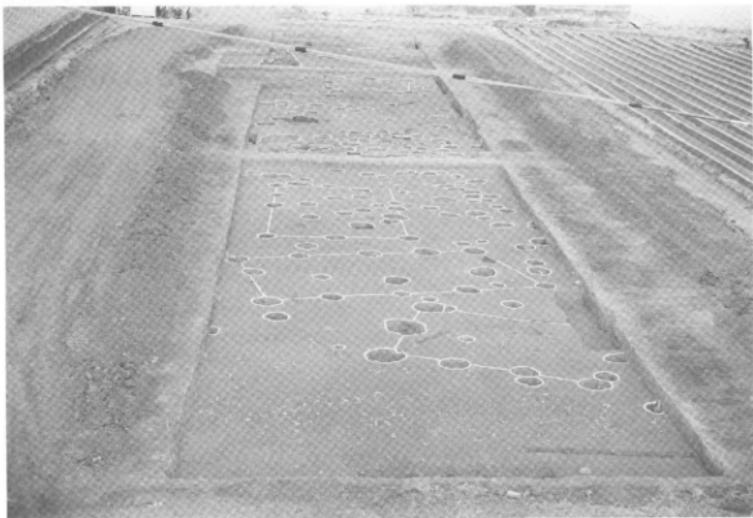


III区 SB 2 完掘状况



IV区 SB 4 完掘状况

P.L. 4



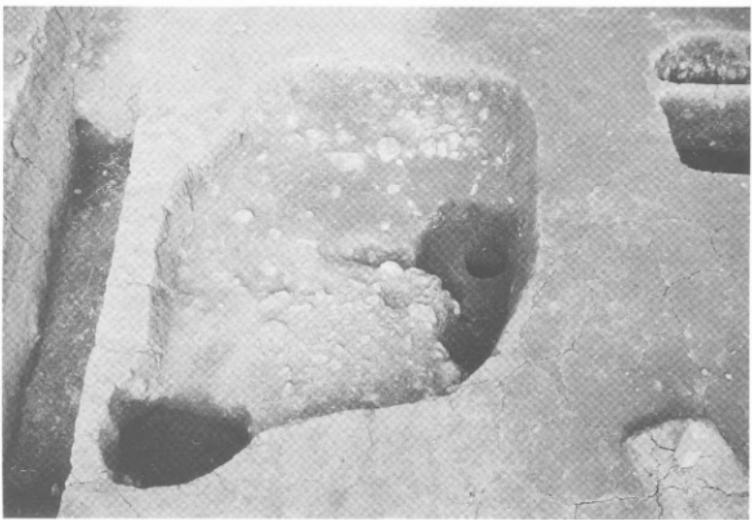
III区　IV区　全景（南から）



全景（北から）



I区 全景（南から）

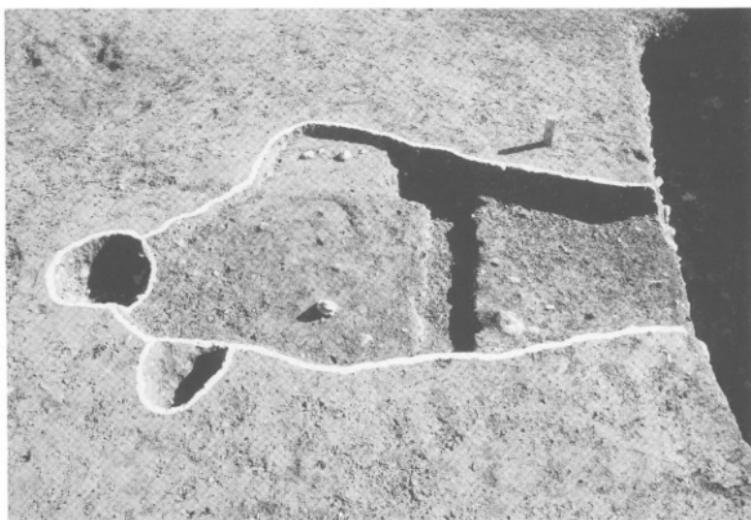


III区 SK1 完掘状況

P L. 6



I 区 SK 2 完掘状况



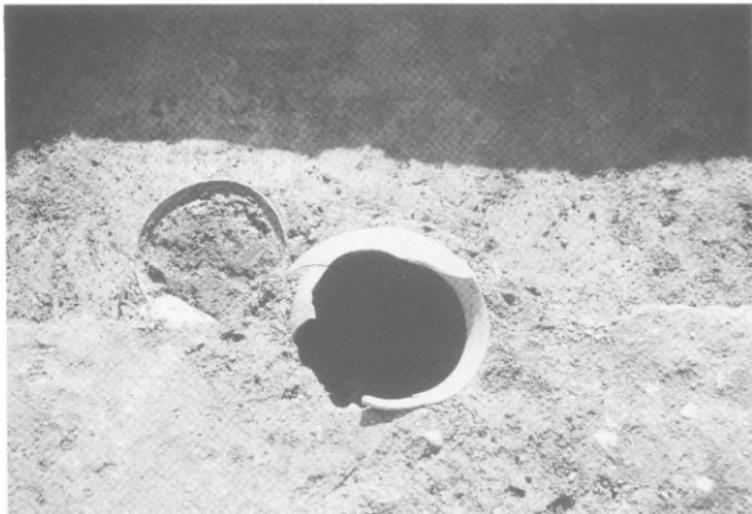
同上



II区 SD1 完掘状況



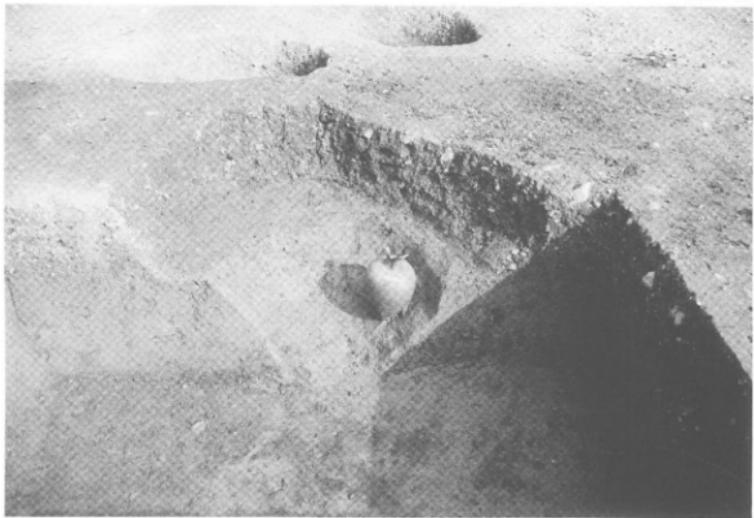
同上 北壁セクション



P 30 (3区) 須恵器 壺 (40) 土師器 壺 (42)



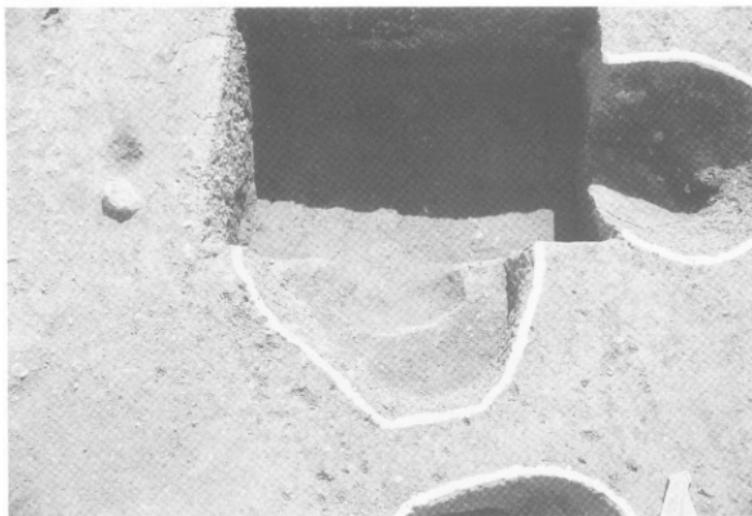
同上 半截



III区 P 30 須恵器 壺 (43)



同上



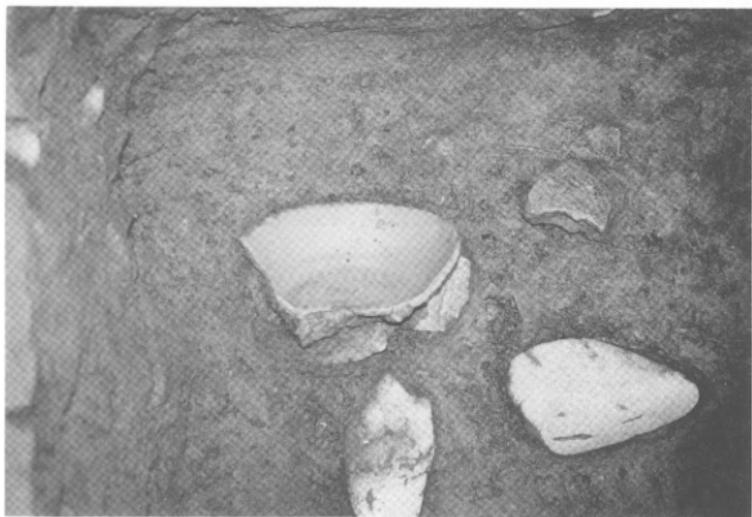
III区 P 30 完掘状况



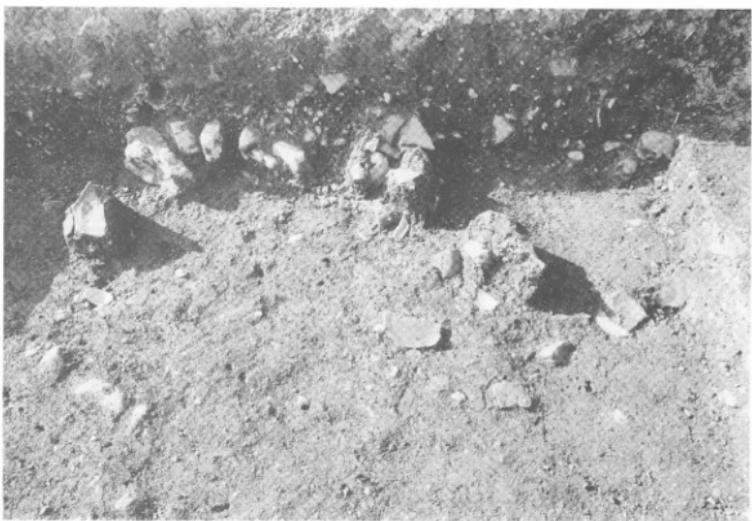
III区 SK1 土器(8) 出土状况



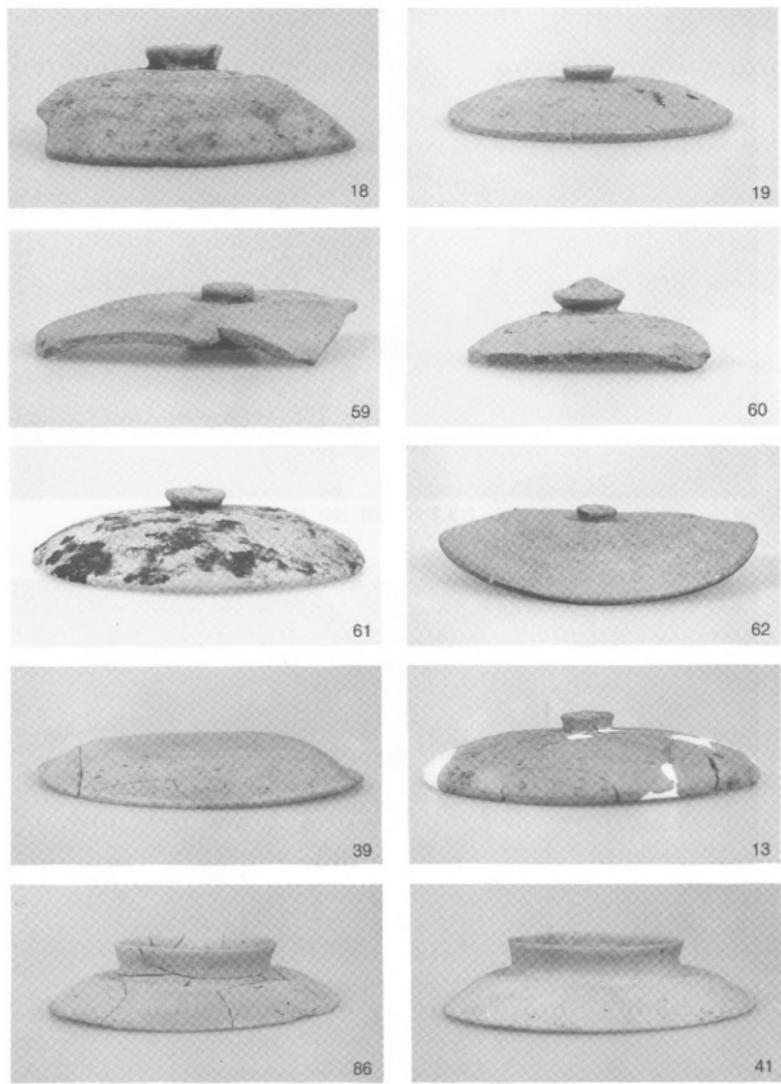
II区 SD1 土器(38) 出土状况



III区 P 37 土器器 (46) 出土状况



II区 SD 1 土器出土状况



須惠器蓋 (18・19・39・59~62) · 土師器蓋 (13・41・86)



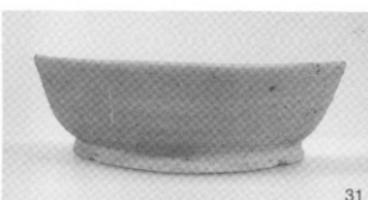
35



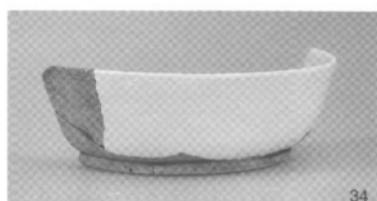
8



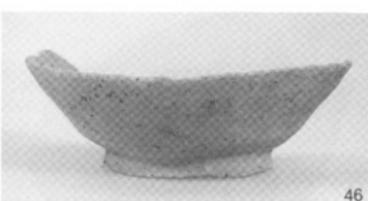
14



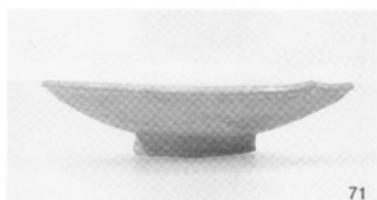
31



34



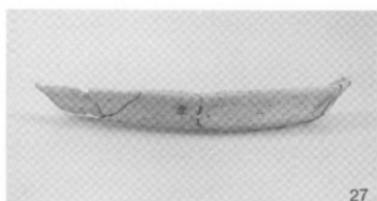
46



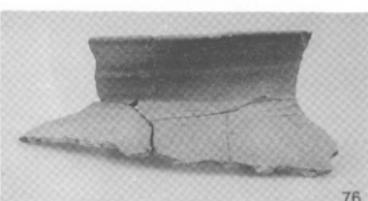
71



85

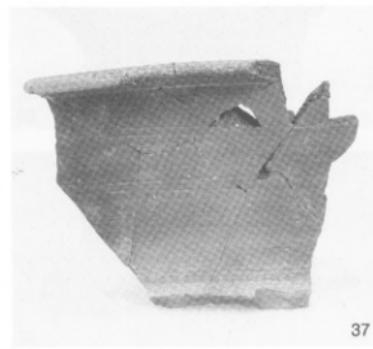
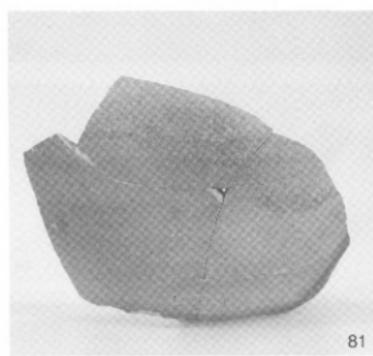


27



76

須惠器坏身(8·14·31·34·35)·同皿(27)·同甕(76)·土師器椀(46·85)·綠釉輪花皿(71)



土師器壺 (42·87) · 須恵器壺 (81·43) · 須恵器壺 (37) · 須恵器高壺 (38)



40

須惠器壺 (40)

報告書抄録

ふりがな	しろ い た い せき						
書名	白猪田遺跡						
副書名	久礼田地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次	1						
シリーズ名	南国市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第17集						
編著者名	三谷民雄 西村直也						
編集機関	高知県南国市教育委員会						
所在地	〒783 高知県南国市大塙甲2301						
発行年月日	1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しろ い た い せき 白猪田遺跡	なんこくし く れ だ 南国市久礼田	39204	040018	133度 39分 12秒	33度 36分 32秒	H 8.12.3 H 9.2.1	1,018.7m ² 県営は場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
白猪田遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物 溝 土坑 柱穴	土師器 須恵器			

南国市埋蔵文化財調査報告書 第17集

白猪田遺跡

—久礼田地区県営扱い手有成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書—

1997・3・31

発行 南国市教育委員会
高知県南国市大塙甲2301
TEL 0888-63-2111

印刷 平和プリント